

JANES

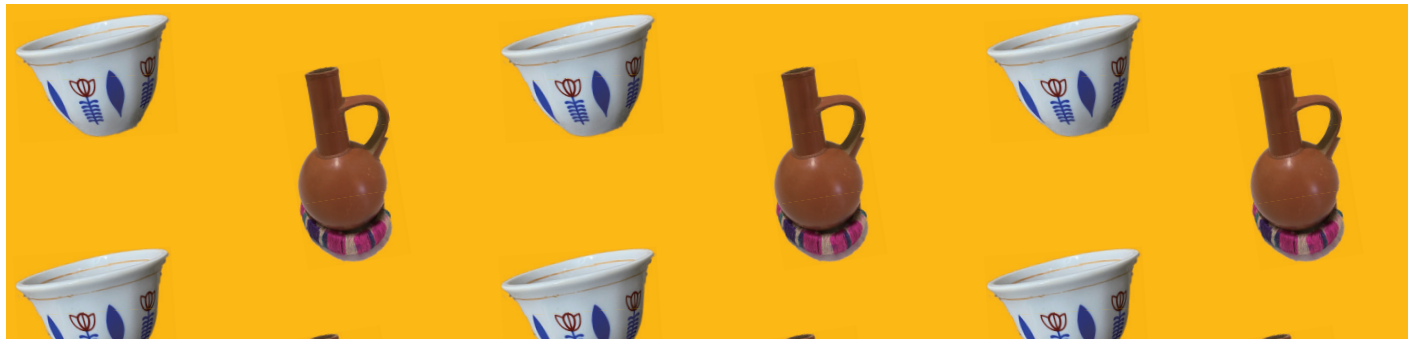
ニュースレター

No. 32-1
Nov. 2024

日本ナイル・エチオピア学会

- 
- 巻頭言
 - 第33回日本ナイル・エチオピア学会学術大会最優秀発表受賞者エッセイ
 - 現地情報
 - 新刊ライブラリー
 - 学会動向
 - 会員の異動

巻頭言



サンブル女性の「月経」

Kyoko Nakamura

中村 香子
(東洋大学)

ケニアの牧畜民サンブルの女性にとって、月経をとりまく環境は、いままさに激変の最中にある。さまざまなプロジェクトが、女子生徒に使い捨てるの生理用品(パッド)を配布するようになり、10年ほど前から少しずつ普及し始めた。その後、就学継続のためのパッドの重要性への認識が高まり、この2-3年で一気に普及が進んだという。当初は、学校に通う人や、町で働く人の必需品とされていたパッドだが、現在では牧畜集落に暮らす女性たちも使い始めているという。

友人のPさんは、牧畜集落で暮らす女性で、現在33歳である。5年ほど前にNGOのセミナーで使い捨てるパッドをもらって初めて使ってみたという。「布でおさえているときは、座っていると必ず漏れて、出かけていると困ったりもするけど、パッドは漏れない。パッドはとてもいいわ」と言う。しかし、その一方で、自分で買ったことはないそうだ。その

最大の理由は、捨てる場所だ。牧畜集落にトイレはない。ブッシュで用を足してパッドを放置するわけにはいけないので、小さくたたんで、家の中に隠しておき、すっかり乾いた頃にこっそり焼却する必要がある。これは厄介だ。困り果てて、森の奥に捨てる女性もいるようで、落ちているのを見かけたこともあるそうだ。

「布で押さえて耐えるということ、サンブルの女性たちはずっとやってきた。よく頑張っている。それは事実かも知れない」と彼女は言った。しかし、こう続けた。「でも、たとえば私がそれ(月経)にどのくらい悩まされているかというと、そうでもない。そもそも、私たちは月経を減多に経験しない。」

彼女は21歳のときに結婚し、現在、11歳、9歳、7歳、4歳、1歳になる子どもがいる。サンブルの女性たちは、20~30代の約20年間にだいたい7~8人の子どもを産んできた。4歳の息子を指さして彼女は言った。「たとえばこの子は、1年9ヶ月母乳を飲み、ようやく母乳を飲まなくなった。そして、私は一度だけ『血を見て』(月経を経験して)この子(末の1歳の息子)を妊娠した。私

は、子どもと子どものあいだに、一度だけ『血を見た』か、見なかったこともある」

初経後、ほどなくして結婚し、その後は出産と授乳を繰り返し続けるサンブルの女性たちにとって、「月経」は、まったく「月のもの」ではなく、もつとずっと「レアな」ものなのである。あらためて脱帽だ。「あなたたちサンブルの女性って本当にすごいです。ちなみに私たち日本人の女性は、子どもをちっとも産まないの、生涯400回ぐらい月経を経験しているのですよ」と私が言うと、「え?あれを400回?そっちのほうがよっぽどすごい!」と本気で驚かれた。

思えば、日本でも2人兄弟が「普通」になるという変化は急にやってきた。サンブルでは、急速な社会変化のなか、女性たちの多くが学校教育を受けている。サンブルの女性が400回の月経を経験するようになる日も、さほど遠くないのかもしれない。

第33回日本ナイル・エチオピア学会 学術大会最優秀発表受賞者エッセイ

ジブチにおける乾燥地農業と廃棄物利用 の可能性—下水の処理水と汚泥、ペットボトル、古着の利用—

Shuichi Oyama

大山修一(総合地球環境学研究所／
京都大学)

Sawahiko Shimada

島田沢彦(東京農大)

Tabareck Ismail

タバレック・イスマイル
(ジブチ農業省)

大山は昨年、2023年7月より京都大学とのクロスアポイントメントを開始し、総合地球環境研究所で研究プロジェクトを開始した。すこしでも環境問題を解決するため、地球の生態系に都市をいかに埋め込むことができるのか、都市で排出される有機性ごみの有効活用を主要なテーマにしている。わたしは2002年から西アフリカ、ニジェールで都市のごみを使った緑化の取り組みを続けてきた。

2018年に東京農大の島田沢彦先生に誘われ、ジブチで都市ごみを使った緑化に取り組むことになった。わたしは2019年10月に初めてジブチに渡航し、それ以降、計6回、ジブチで研究活動に従事している。ジブチは紅海とアデン湾に面した国で、面積は2万3000平方キロメートルである。これは四国とほぼ同じ面積である。主要な産業はエチオピアへの中継貿易、運輸、そして港湾収入であり、地政学的に重要な位置を占め、フランスやアメリカ、イタリア、中国、日本が軍事基地を設置し、海賊対策に取り組んでいる。食料生産はGDPの3%にすぎず、主食は小麦であるが、その大部分を輸入に頼っている。

ジブチの首都ジブチ市の気候は、とにかく暑く、年間の平均気温は29.9℃で、7月と8月の最高気温はゆうに40℃を超える。年間降水量は163mmで、明瞭な雨季と乾季はなく、いつ雨が降るのか予想できない。熱帯極乾燥の砂漠気候である。近年では異常気象としてサイクロンが襲来する。パキスタン沖で発生したサイクロンが襲来し、ジブチに上陸すると、水蒸気の供給がなくなり、サイクロンは消滅する。

乾燥が厳しい環境で、天水に依存した農業はきわめて難しい。そのため、ジブチの農業ではいかに灌漑水を得るのが課題となる。ジブチ市の人口は2019年の推計で61万9900であり、その10km南にドゥダという地区がある。ドゥダはソマリが住んでいた村であったが、ジブチ市の拡張とともにゴミ捨て場がつくれ、EUの援助で2017年に下水処理場が建設された。下水処理場には曝気槽と沈殿槽、乾燥槽があり、ソーラー発電で稼働するポンプで、農場にむけて処理水が送られている。

農場は下水処理場に隣接しており、広さは500m四方

で、49区画に分割されている。わたしたちは100m四方の土地を囲って、その1区画で作物栽培の実験に取り組んでいる。ジブチの人びとの農場ではメロンがもっとも多く栽培されており、そのほか、ナツメヤシやザクロ、トウガラシ、トマト、ナス、トウモロコシ、タマネギなどが栽培されている。肥料には、下水汚泥が使用される(写真1)。農場を建設するときには、侵略性外来植物であるメスキート(*Prosopis juliflora*)が多く生育しており、駆除するのに手間どった。フェンスを建て、パイプを敷設し、貯水するようになるまで、多大な労力が必要であった。



写真1 下水処理場の乾燥槽から下水汚泥を取り出す。栄養分を豊富に含み、貴重な肥料となる。

下水処理場からの送水は1日おきに農場へ来るはずであるが、ポンプの故障や電気系統のトラブルで頻繁に止まり、1週間から10日間にわたって断水が続くこともある。マンゴーやパパイヤ、レモン、オレンジ、アボガド、グアバ、いろんな果樹を植え付けたが、強い日射と乾燥により全滅した。無残であった。2020年2月に植え付けたナツメヤシの苗木は高さ60cmであった(写真2)。4年のあいだに、



写真2 ナツメヤシの苗木の植え付け(2020年2月):
苗の高さは0.6mであった。



写真3 生長したナツメヤシ(2024年3月): 株の高さ
3mになった。

高さが3mにまで生長した(写真3)。ナツメヤシは最終的に35本、ザクロ5本が定着した。ナツメヤシは乾燥に強いイメージがあるが、1本のナツメヤシに対して毎日60リットルの灌水が必要で、水のロスを含めると125リットルが必要であるとされる(Hami and Yves 2018)。35本のナツメヤシを植えると、それだけで3,750リットルの灌水が必要となる。

アフリカ、アジア、中東の乾燥地では都市の下水を農業に使っていることが報告されている(Hoogendijk et al., 2023)。極乾燥地域のジブチでは水は貴重であり、都市の下水を有効活用し、紅海に下水処理水を流すだけにせず、食料の生産につなげる価値はあるだろう。頻繁に発生する断水、長い期間にわたって水が来ず、太陽が照りつづけ、そんな環境下で、どのような工夫をすれば、作物を育てることができるのだろうか。作物の種類、植え付けや灌水の方法、土壌水分の蒸発を防ぐマルチの種類、強烈な太陽の光を避ける日よけの設置などを検討する必要がある(写真4)。



写真4 ジブチ市内のゴミ捨て場:農業に使える資材がないか探す。



写真5 東京農業大学SATREPSドゥダ農場

下水といえども、貴重な資源である。節水に努めながら、農業を続け、家畜飼養を組み入れたアグロ・パストラルシステムをつくるーそれは不可能なように思え、とても難しい課題である(写真5)。それゆえ、この困難な課題に取り組むことに研究者としての気持ちが高ぶり、情熱が沸き立ってくるのである。

参考文献

- Hoogendijk, K., Myburgh, P.A., Howell, C.L., and Hoffman, J.E. 2023. Irrigation of agricultural crops with municipal wastewater: A review. *South African Journal of Enology and Viticulture* 44(1): 5718.
- Hami S. and Yves C. 2018. Water uptake by date palm on Haplic Luvisols in the Djibouti coastal plain. *Geoderma Regional* doi:10.1016/j.geodrs.2018.e00189

第33回日本ナイル・エチオピア学会 学術大会最優秀発表受賞者エッセイ

エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県における中世ハララ関連 遺跡の人類学的・考古学的調査(ポスター発表)

Hitoshi Endo

遠藤仁(大東文化大学・東洋研究所)

Chikage Oba

大場千景(アルシ大学)

そこは、エチオピアの僻地に違いなかった。我々は、日暮れにオロミア州バーレ東県とハラルゲ西県の県境、ワビシェベレ川の渓谷を望む標高1500mぐらいのところを尾根伝いに歩いていた。渓谷の向こうには、13世紀のイスラームの聖者とされるシェイク・フセインの廟がある。今日中に、噂のサカテ遺跡にたどりつける気配はなかった。

首都アディス・アベバから直線距離で南東280km、ハラルゲ西県の県都ハウィ・グッティンナからさらに60km、山間を上り、オロモ解放戦線の聖地的町ビッディーカを超え、さらに、道ともいえない山道をバイクで小一時間。人々の話ぶりから察するに、あと小一時間ばかり歩いたらたどりつけるはずであった。実際には、そこからさらに、ごつごつした石ばかりの山道を上り下りし続ける8時間(途中で野宿を挟む)の道のりが待っていた。案内人の地元民以外、我々の一行でその道中の過酷さを知る者は誰もいなかった。私と民族考古学者の遠藤さん、オロミア州文化庁の役人でハラルゲ県の遺跡や岩窟壁画に詳しいナシル、ハラルゲ県庁の文化局員2名は、水すらろくに持たず、気楽に山深い山中に踏み込んでしまっていたのだ。

私がこの過酷な旅に遠藤さんらを巻き込んでしまったのには深い理由がある。それは、私の口頭伝承広域比較調査で飛び出してきた、エチオピア北東地域に通底音のようにして流れている、中世期に複数の民族間で起こったとみられる人口減少に関する伝承の謎に迫るためであった。私が目をつけたのは、バーレ県北部からハラルゲ県一帯にかけて中世期に存在していたイスラーム交易商人集団ハララの全滅伝承とその遺跡群だった。というのも、バーレ県北部に居住するアルシの人々がその地に移住する前に豊かに暮らしていたハララ「巨人」集団が、「ラッビィの怒り」を買って、どこかに消えてしまったという物語、彼らがいなくなる前に多くの宝物を地中に埋めていったという伝承を聞き、そしてこれまで、その地に散在するいくつものハララ関連遺跡を目撃してきたからだ。私は以前からずっと、この遺跡群を考古学の専門家に調査してもらいたいと考えてきた。遺跡の分析は、口頭伝承の分

析にしか能のない私には手に余る。そこで、発掘経験豊富な考古学者の遠藤さんにエチオピアに来ていただいた。バーレの人々からサカテにはハララのモスクとか、なんだかすごいものがあるとは聞いていた。そして僻地であることも聞いていたが、ここまで僻地だとは。しかし、言うこの体でたどり着いたそこにあったのはハララがかつて暮らしていた城壁都市の形跡だった。

(歴史人類学者、大場千景 筆)



写真 現在、モスク跡は、巡礼地として機能しているので、地元の人々がモスク跡付近に休憩所を建てていた。この地域に暮らすハラルゲとアルシの人々、男女30名程度が響應のために集まってくれた。(2023年8月 遠藤仁 撮影)

私は日本や南アジア、西アジア、北アフリカの沙漠や山岳地帯、離島など僻地と呼ばれる場所で発掘や物質文化の調査を四半世紀続けてきた。そのため、体力や気力には自信をもっていたが、サカテ遺跡へと至る道程は非常に過酷で、疲労のあまり何の目的で歩いているのかを忘れかける程であった。しかし、目の前に現れた遺構群は疲れを忘れさせる威容で、気がつけば夢中で撮影や測量を行っていた。遺跡は往々にして、現在の人里から離れた位置に立地していることがある。自然環境や流通状況の変化で、人々の居住戦略などが大きく変わることがあるからであるが、サカテ遺跡の僻地ぶりは度が過ぎているのではなかろうか。遺跡から目視できる範囲に村がない。その様な場所になぜこの規模の遺跡があるのか、と思いをはせながら記録していると、周辺から人々が集まってきているのが見えた。我々の来訪が伝達されたようで、遠方からの客人のために数km先（後で衛星画像で確認した）の村から人々が集まり、ヤギまで連れてきてそれを屠り、饗応してくれたのである（写真参照）。遺跡だけではなく、現在のこの地に生きる人々にも感激し、再びこの地に立ち、本格的に調査を行いたいと思わせるには十分な滞在であった。

サカテ遺跡は、中世東アフリカでも最大級の大きさのモスクを中心とした住居や貯水池などの遺構群が全長5km以上の周壁に囲まれ、小規模な都市と見なせるものであった。21世紀の現在、研究者や行政関係者に把握されていない、密林や砂に埋もれてもいない中世都市が発見されるとは、驚愕すべきことである。大発見と呼んで差支えない成果だと考えているが、これまで一般的に見れば地味な研究活動が続けてきた身としては、今後の調査や成果発信をこの発見に見合う形で進めていかねばという贅沢な悩みとプレッシャーで今から身が引き締まるおもしろいである。

大場さんに誘われ、エジプト調査の帰りにお試し感覚で寄った初のエチオピア調査で、この様な当たりを引いてしまい、自分の今後の調査計画を大きく考え直す必要がありそうである。エチオピアはまだ僻地しか体験しておらず、言語も未習得であるが、遺跡や伝統的な農具など見たいと思うものは色々ある。そのような訳で、今後はエチオピアの調査に本格的に関わっていきたいと思う。皆さまよろしく願います。

（民族考古学者、遠藤仁 筆）



写真 サカテ遺跡の道中、雨が降ってくるので、廃村で雨宿り。(2023年8月 遠藤仁 撮影)



写真 山の頂上、サカテ遺跡の道中にあった民家。我々はここをキャンプ地とした。寝袋等の装備もなく、右手の牧童小屋で6人雑魚寝。雨季で夜中雨が降る。(2023年8月 遠藤仁 撮影)

現地情報

ティグライ州メケレの今

Yoko Furusaki

古崎陽子（メケレ大学／フクナガエンジニアリング）

メケレ大学で2010年10月から日本語講師やICES20の論集編集などをしております、古崎です。

ご存知かと思いますが、ティグライ州は2020年11月から2年にわたり内戦状態にあり、電力供給の停止、物流含めた州境封鎖、銀行口座の凍結、電話・インターネットの停止などの非常に困難な状況にありました。2021年7月末までは私もメケレにおり、うち3ヶ月ほどはこの封鎖を直接体験しました。ただしメケレでは地上戦は行われず、単発のドローン攻撃はあったものの大規模空襲などはなかったため、街が焼け野原になるようなことはありませんでした。

昨年10月に2年以上ぶりにメケレに戻った際、街が静かなことに驚きました。直前にティグライ軍の戦死者が発表されたタイミングだったとのことで、多くの人が喪に服していたためでした。戦死、または内戦中の封鎖による食糧や医療品の不足で亡くなった人は多く、ティグライ人であればみな知人の誰かを亡くしていると思われます。メケレ近郊の街に住んでいた友人のお姉さんも、交通遮断のせいで定期的に必要な透析ができずに亡くなったと聞きました。

一方で、内戦前はほとんど見かけなかったような豪華なレストランや富裕層や外国人向けのホテルが多数できて

おり、景気が良さそうに見えます。世界中のティグライ人が復興のために投資しているということもあるのでしょうが、なんと一部は内戦中にオープンしたとのこと。食料調達もままならないあの封鎖の中でどうやって、と驚きを禁じ得ませんが、州外からの密輸、国連職員など外国人向けの商売、州外からの送金仲介による稼ぎ、などで内戦中にかなり儲けた人もいます。ある在欧のエチオピア研究者は、「銀行封鎖中の送金方法は多様で、論文にしたら面白いと思うが、秘密保持のため書けないのが残念だ…」と言っていました。厳しい状況下で人的・物的資源を駆使してリスクを取り、たくましく生き延びる姿には感心させられます。ただし一般人はインフレ（卵の値段が2年前の2倍）や失業率の高さで苦しんでおり、貧富の差が開いた印象です。

メケレ大学は2023年8月に2年ぶりに再開しました。ティグライ人の若者の多くは学ぶ意欲が下がり、「どうせすぐ死ぬから、勉強よりも今を楽しもう」というような考え方も増えてしまっているようです。大変な絶望を体験したであろう若者に私ができることは限られていますが、日本語講座を通して少しでも学ぶ楽しさや複眼的な物の見方を伝えられればと思っています。

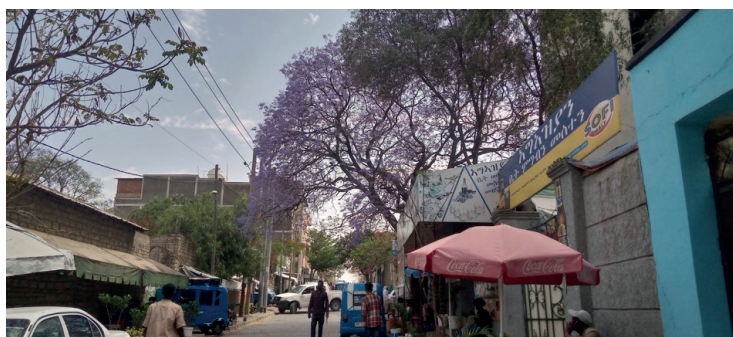


図1 戦前と変わらぬ様子のメケレ
(2024年3月、筆者撮影)



図2 内戦中にオープンしたLibanos Hotel
(2024年9月、筆者撮影)

新刊ライブラリ

ヴァンサン・ドゥフェ、カリム・ルブール(作)、レオ・トリニダード
(絵)石村恵子(訳)『エチオピアの季節』花伝社、2024

Kae Amo

阿毛香絵(京都大学大学院・アジアアフリカ地域研究研究科)

軽やかなタッチのバンド・デシネ(フランス語の漫画、通称 BD)を通して綴られるこのノン・フィクションの物語には、主人公となる二人のフランス人ジャーナリスト、ヴァンサン・ドゥフェとカリム・ルブールが登場する。主な語り手のカリムは記者特派員として2015年から2017年にアディスアベバに赴任し、3年前よりエチオピアに赴任していたヴァンサンと共に、当時急速に発展を遂げていたこの国を観察する。二人の目に写るエチオピアは様々な矛盾に溢れており、独自の文化の重みとプライドを背負い、中国からの投資を受けた巨大開発プロジェクトを進め、南スーダンやソマリア、エリトリアからの難民を抱え、民族間の徐々に高まる緊張と対立という時限爆弾を抱えながら、「それでもこの国は素晴らしい(Ce pays est quand même magnifique.)」(p.75)と言わせる魅力を持っている。

本書で最も印象的なのは、コミカルなタッチで描かれた3年間の細かい出来事や、より大きな事件を通して、エチオピア社会の内部が孕む緊張がじわじわと高まり、徐々に起爆していく様子が描かれていることだ。

中国の強力な投資をバックにした開発プロジェクト、例えば、アフリカ連合本部の巨大な建物(p.28)や、ハイウェイ、開通したばかりのトラムウェイ(p.107)、建設中の地下鉄などのインフラ、そしてこちらは100%エチオピアの投資と誇るナイル川のダム「ルネッサンス」(p.77)…こうした「箱」だけ見ると、国は急成長を遂げ、人々の生活も近代化していくように見える。しかし、国内外へ向けた奇跡の発展神話というタテマエは、当時の与党であるティグレの政権が他の民族や対抗分子を意図的に黙らせる徹底された監視社会によって維持されていた。

緊張状態の中で押さえつけられてきた少数民族、国家の大規模な開発事業に実質的な生活の向上を実感できない底辺層の人々、政治的発言権を奪われたかつての支配層のアムハラの人々、あるいはオモロの人々…が、徐々に実質的な抗議運動を展開する(p.135「蜂起」)。

しかし、蜂起の様子やそれに対する抑圧のエピソードは政府の管理下の国営メディアでは取り上げられず、ましてや海外のメディアや国際社会にとってはますますブラインドされた状況にある。評者がフランス在住時に、同じくジャーナリストだった夫が2014年に同国に渡航した

が、一週間の間どちら側からもSNSやメッセージは一切届かず、本人が帰国してパリの空港に降り立った瞬間、それまで送られたメッセージが一斉に届いたのは記憶に新しい。本書には、カリムら外国人ジャーナリストのインタビューを「当局に捕まる」と拒絶しつつこっそり家に招き入れ、穴の開いたエチオピアの国旗、虐殺の様子等について話してくれたバハルダールのアムハラ市民もいた(p.152)。情報という意味で、エチオピアはまさに霧の中である。

あとがきにあるように、カリムらがエチオピアを去った後の2018年、オモロ出自のアビィ・アハメド大統領の新政権が立つも、ティグレによる反乱で2020年に内戦が勃発。本書に描かれていた緊張関係はついに爆発してしまう。

本書のタイトルである「エチオピアの季節(une saison en Ethiopie)」について、記者の解説で触れられているように、これが詩人、アルチュール・ランボーの「地獄の季節(une saison en enfer)」への目配せだとしたら、本書の最後に引用されているアムハラ語のことわざ、「中は楽園、外は地獄の業火(Mähalwan gännät, dardarwan esat)」(本書では仏語訳だがここでは出典をたどり評者が意識)は示唆的である。この「中」は、原書の仏語版で「エチオピアの我が家」とされているが、この元になったのはエチオピアのキリスト教徒が天使や聖人たちへ向かって祈った言葉であり、「業火のただ中の楽園のように、我々の国を守り給え」という意味があったという(1)。「中」とは神の権力に守られた教会であり、それに対してそれを取り巻く「外」は、人の所作によって汚(けが)れた危険な境界を象徴する。前者を、地理的にも標高が高く天国に近い守られた聖域、後者を地理的にも低く熱気に満ちた「下界」であり、周囲を取り囲むイスラーム諸国からの侵略や流行り病、自然災害などの脅威を象徴しているという解釈もある(Voff, 2013; 110; Gascon, 2006)。カリム達も訪れているラリベラの岩窟教会、ハイレ・セラシエとレゲエの聖地、シバの女王…、エチオピアはそれ自体が神話的な地である。

しかし、「内」で、あるいはその「外」で何が起きているかについて、結局どちらか側にしか居ることので



きないエチオピアの人々自身にとっても、全貌は見えていないのではないだろうか。カリムら外国人記者の報道内容をコントロールしようとするのが現在の「中心」で権威を守ろうとする者たちだとすると、「周辺」から来る難民や、反体制分子とされる他民族、他宗教の人々もまた、今のエチオピアを構成する大切な人々に違いない。ソマリ地方を訪れた際、雨で足止めされたカリムらが宿を求めたとき、何も持たない村人たちが救援物資かもしれない食事を他者の彼らに振る舞ってくれた(p.132)。中国の投資で高みに建設される都市インフラよりも、周辺で生き延びようと支えあう人々の様子にこそ、エチオピアの潜在力を感じるのは評者だけだろうか。

ヴァンサンは「6年間エチオピアにいたけど、この国の表面をかすめることしかできなかった気がする」(p.182)と言う。それでも彼が国民料理インジェラをふるまうために市場でアムハラ語を使って材料を探す様子や、ラリベラの農村を訪れたカリムが、自身が子供時代を過ごしたグルノーブルの田舎を想起する様子に、彼らがもう少しだけ、皮膚より下のエチオピアに触れようとしている姿が感じられた。

Gascon, Alain (2006) Sur les hautes terres comme au ciel: Identités et territoires en Éthiopie, Paris, Éditions de la Sorbonne.

Voff, Benjamin (2013) "La perception du pouvoir en Éthiopie à travers les biographies amhariques du ras Mäkwännən (1852-1906)", Histoire. Institut National des Langues et Civilisations Orientales- INALCO PARIS - LANGUES O'.

(1) 人類学者、エチオピア研究者 El o i Ficquet (EHESS) による解説から。

学会動向

2024年度総会

2024年4月21日(土)に、東洋大学白山キャンパスで、日本ナイル・エチオピア学会2024年度総会が開催されました。議題は以下のとおりです。

議事

- ・2023年度事業報告について
- ・2023年度会計報告及び会計監査報告
- ・2024年度事業計画(案)について

審議

- ・2024年度以降の収支改善案について
- ・2024年度予算(案)について

報告

- ・2025年度(第34回)以降の学術大会について
- ・第30回高島賞について
- ・評議員選挙の実施について
- ・国際エチオピア学会について
- ・会費滞納者のNES投稿と研究発表について

2023年度事業報告

1. 公開シンポジウム「女性兵士が問いかける地平—エチオピア、ルワンダ、ソ連、ウクライナの事例から」2023年4月15日(土)、ハイブリッド開催(開催校:大阪公立大学)
2. 第32回学術大会
2023年4月16日(日)、ハイブリッド開催(開催校:大阪公立大学)
3. 第29回高島賞の授与
清水信宏 対象活動「エチオピア・メケレ地域における研究活動」 Choi Eunji “Rethinking Informality in Public Transport Management: Dynamics between State Intervention and the Current Practices of Tera Askebari in Addis Ababa. Nilo-Ethiopian Studies“ No.26: 1-16, 2021.”
4. 第32回学術大会最優秀発表賞の授与
田中綾華「エチオピア西南部アリ地域における気鳴楽器と演奏集団」
5. 学会誌の発行・編集
Nilo-Ethiopian Studies (No.28)の編集・J-Stageへの登載
6. ニュースレターの発行・編集
JANES ニュースレターNo.31-1, 31-2 の編集・公開
7. 会費請求
2023年6月に請求書を送付した。

- 8.臨時運営幹事会・臨時評議員会の開催
2023年9月18日、オンラインで臨時運営幹事会を開催
2023年12月9日、オンラインで臨時評議員会を開催

第33回学術大会

2024年4月20・21日に、東洋大学にて、第33回学術大会が開催されました。最優秀発表賞には、大山修一さん・島田沢彦さん・タバレック・イスマイルさん、および遠藤仁さん・大場千景さん（パネル発表）が選出されました。公開シンポジウムおよび研究発表の演題と発表者は以下のとおりです（敬称略）。

【公開シンポジウム】

山内太郎、杉田映理・大阪大学MeWプロジェクト学生メンバー、千葉暁子・大門碧、中村香子・Toyo-MeWプロジェクト学生メンバー「サニテーションと月経をめぐる課題の諸相—沈黙の殻をやぶり動き出した世界—」（共催：東洋大学国際共生社会研究センター）

【研究発表】

石川博樹「19世紀中葉のエチオピアのショア地方におけるパン文化の変化とその背景」

下山花「根栽作物エンセーテを主食とする人びとの農業と食にみられる変化：新作物ライコムギを受容したエチオピア南西部ガモ高地の事例」

吉田早悠里「民族連邦制と国家開発プロジェクト：エチオピアにおける国立コーヒー博物館」

Jacqueline Muthoni Mbugua, Yoshiya Touge, Toshikazu Tanaka, “Preliminary Soil Moisture Measurement in the Upstream of Lake Turkana Basin toward Application of Low-Cost Observation Instruments”

大山修一、島田沢彦、タバレック・イスマイル「ジブチにおける乾燥地農業と廃棄物利用の可能性—下水の処理水と汚泥、ペットボトル、古着の農業利用—」

Alula Tesfay Asfha, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Selam Gebrekiristo, Semhal Tadesse, Mulugeta Fisseha, “3D Documentation Technologies for Preserving Vernacular Architecture in Tigray, Ethiopia”

有井晴香「代替養育における結婚交渉にみる親子のあり方：エチオピア西南部マーレの事例から」

森口岳「1980年代におけるJVCアジバール病院の活動について（1）：日本における緊急支援史とNGO社会史の視点から」

松原加奈「民族と雇用の論理—エチオピア革靴産業における労働者の事例—」

【研究発表（ポスターセッション）】

加藤基「エチオピア正教会におけるマリア信仰の婚姻規定への影響：ザルア・ヤアコブのマリア論とマリア奇跡譚の読解から」

遠藤仁、大場千景「エチオピア・オロミア州西ハラレグ県における中世ハララ関連遺跡の人類学的・考古学的調査」

元木春伽「エチオピア西南部ジンカ市における椅子と女性の作業姿勢」

久富颯介、杉山慧、生井沢健斗、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美、タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス「アディスアベバ建築遺産へのデジタル計測技術の適応可能性」

生井沢健斗、久富颯介、杉山慧、朝野太仁、清水郁郎、岡崎瑠美、タデッセ・ギルメイ、ファシル・ギオルギス「エチオピアの都市住宅における住みこなし：アディスアベバ・アルメニア人地区を対象として」

村橋勲「南スーダン、ロピットにおける頭飾りの物質文化：歴史的展開とアイデンティティについて」

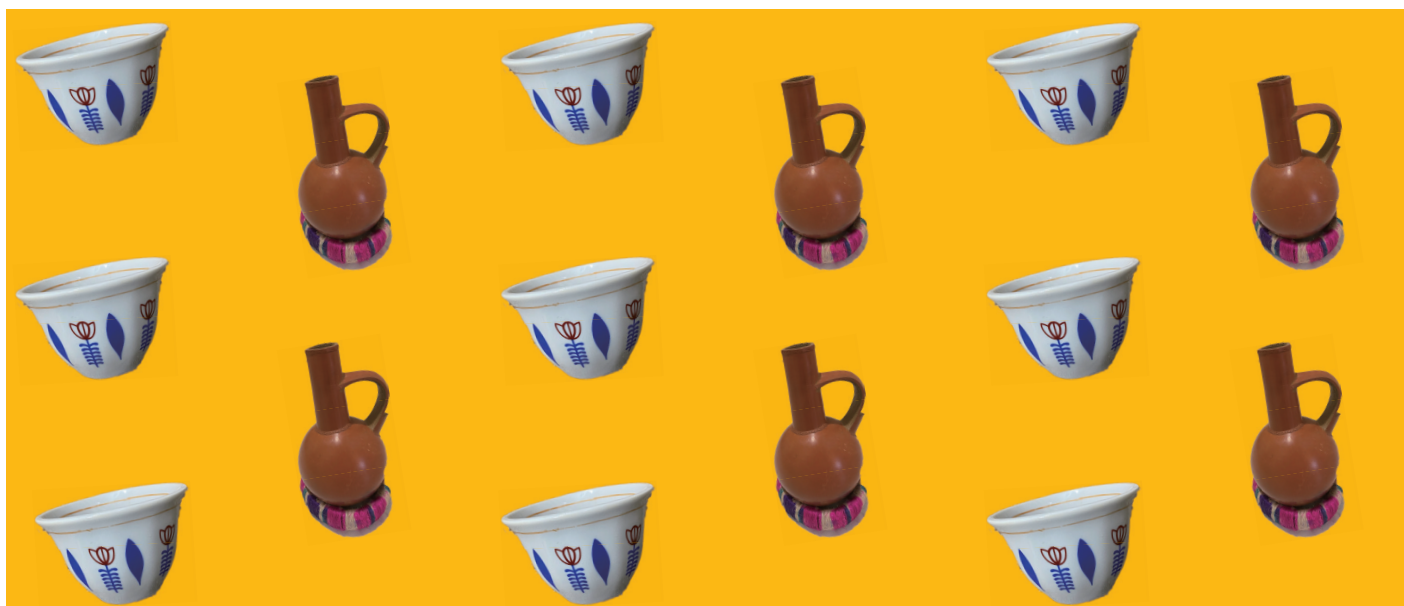
田中利和、是恒さくら、ウォリソの人びと「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究⑧：ともに描き歩むウォリソ産地下足袋の未来」

Tadesse Girmay, Rumi Okazaki, Sosuke Hisatomi, Satoi Sugiyama, Kento Namaizawa, Taito Asano, Keita Aoshima, Nobuhiro Shimizu, “Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa: An Overview of What is Happening in the Vicinity”

田中綾華「創出される気鳴楽器の演奏実践：エチオピア西南部を事例として」

Satoi Sugiyama, Sosuke Hisatomi, Kento Namaizawa, Taito Asano, Rumi Okazaki, Tadesse Girmay, Keita Aoshima, Nobuhiro Shimizu, “Urban Redevelopment and Architectural Heritage in Piazza, Addis Ababa: Case of Former Residence of Minas Kerbekian”

Rumi Okazaki, Alula Tesfay Asfha, Tadesse Girmay, Selam Gebrekiristo, Semhal Tadesse, Mulugeta Fisseha, “Architectural Heritage of Quien Village: Case of Former Residence of Riese Debri Gebremariam”



会員の異動

新規入会者(2023年11月以降)

遠藤仁	大東文化大学東洋研究所 正会員
峠嘉哉	京都大学防災研究所 正会員
生井沢健斗	芝浦工業大学建築学部 正会員(学生)
久富颯介	芝浦工業大学理工学研究科 正会員(学生)
元木春伽	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 正会員(学生)
杉山慧	芝浦工業大学理工学研究科 正会員(学生)

編集後記

遅くなりましたが、冬の訪れ前に今号を発刊することができました。今回は、これまで以上に多くの写真を掲載することができ、視覚的にも楽しんでいただける内容となっております。ご寄稿いただいた会員の皆様には心より感謝申し上げます。読者の皆様にも、充実した内容をお楽しみいただければ幸いです。今後も、引き続き皆様からのご支援・ご意見を賜りますようお願い申し上げます。(松波康男)



JANESニュースレター No. 32-1

2024年11月8日配信

編集・配信：日本ナイルエチオピア学会

編集委員：松波康男、相原進、清水信宏

表紙写真：ワベ溪谷、夕暮れ時の尾根。（オロミア州）
撮影：遠藤 仁（2023年8月）